

4

人がいる駅の風景の実現に向けて

～延岡駅周辺整備プロジェクトを例に～

乾 久美子
INUI Kumiko乾久美子建築設計事務所
横浜国立大学大学院／都市イノベーション学府 Y-GSA

多様な主体がかかわる拠点施設（駅）の整備においては、施設と人の両方をつないでいくような環境づくりが重要となる。市街地のにぎわいを取り戻すデザイン実現にむけた取り組みについて延岡駅での事例をもとに解説いただく。

デザイン監修者という役割でプロジェクトの上流から関わる

8年以上にわたって延岡駅の周辺整備計画に取り組みました。JR駅舎前に建つ複合施設「エンクロス」を中心に、東西自由連絡通路、東西のロータリー、駐輪場の整備など全部で13の要素を一的に整備しました。多様な要因によって衰退するまちなかをどう再生していくのかということについて、市民と共に考えたり、延岡市やJRをはじめとする交通事業者、土木や都市計画の専門家とも協働したりしながら、立場や専門分野を超えた多様な主体と共に検討するという計画でした。

私たちは「デザイン監修者」として全体を最後まで伴走し、中心にある複合施設や東西自由通路の



写真1 複合施設「エンクロス」



写真2 複合施設「エンクロス」

上屋は基本・実施設計、工事監理までを行っています。建築設計者は基本計画後に関わるのが一般的ですが、この計画において最初の業務は基本計画で、通常は都市計画コンサルタントが検討するような内容でした。

「駅まち市民ワークショップ」と「駅まち会議」で駅まちの可能性を探る

デザイン監修者という立場は、駅を中心とする市街地のにぎわいを取り戻したいという意向のみがあり、どのような規模の建物をどこに建てるのかが明確でないという初期段階だからこそ、市民と向き合うことのできる顔の見える個人が引き受けるべきだ、のような考え方でつくられたものだと思

ます。このような試みを後押ししたのは延岡市内の建築士の集まりである延岡建築士会です。以前よりまちづくりに奔走していた彼らが、コミュニティ・デザイナーの山崎亮さんのアドバイスを受け、場所や空間、都市についてデザインの次元で考えることのできる人材の必要性を延岡市に訴えることから始まったと聞いています。

デザイン監修者という立場をつくり、駅とまちの両方をつないでいくような環境づくりをアドバイスした山崎さんですが、物的な環境づくりだけではなく、そこでの活動を市民自ら生み出し、継続させていくような仕組みづくりの重要性も説き、山崎さん率いるstudio-Lによりコミュニティ・デザインも同時に始まりました。コミュニティ・デザインは「駅まち市民ワークショップ」の開催や、市民活動団体のリサーチなどでしたが、駅まち市民ワークショップは毎月のように開催され、駅前にどのような活動があると日常的に人が集うようになるのかということを議論するものとなりました。

駅まち市民ワークショップと同時に交通事業者や県、商店街などのステークホルダーによる「駅まち会議」が開催されました。駅まち市民ワークショップがソフトの議論をすることに対して、駅まち会議はハード、つまり具体的な設計内容を議論するものです。

初期段階から空間論を盛り込む

これらの二つの会議体が開催されたのは、基本計画策定時というプロジェクトの初期段階です。一般的には目指す目標などを言葉だけで議論することもできたかもしれません、空間的なアイデアを議論の中に盛り込むことで、より的確で深い議論をするべきだと考えました。

しかし、規模も機能も明確でない中で空間的なアイデアを構築することは難しいものがありました。どの次元で何を決めることが、その後の場所づくりに役立つか。そして、それはどのように表現し、ソフトとハードの両方の議論を行っている市民や関係者に共有できるのかというような、「デザイン」の存在論が試される場面でした。

基本計画段階での空間的アイデアは大雑把なものでありながら、これからつくるものの本質を捉えるモデルであるべきです。デザイン監修者として任命されてから、何度も延岡市を訪れて話を聞き、あちこちを歩き回るなかで「ちらし寿司（またはチャーハン）」「市民活動の可視化」「JR既存駅舎と一体となる計画」という三つの考え方を示しました。これらは、このタイミングでこそ可能な「デザイン」だという認識で提案しました。

駅まち会議（関係者会議）
ハードについて話し合い
2011年5月～2012年3月



デザイン
監修者
ワーキング
検討
承認

基本計画
2012年5月完成

駅まち市民ワークショップ
事務局+studio-L
2011年6月～2012年2月



想い
意見

プレイヤー
WS
(団体対象)
ソポーター
WS
(個人対象)

図1 延岡駅周辺整備プロジェクトの二つの会議体

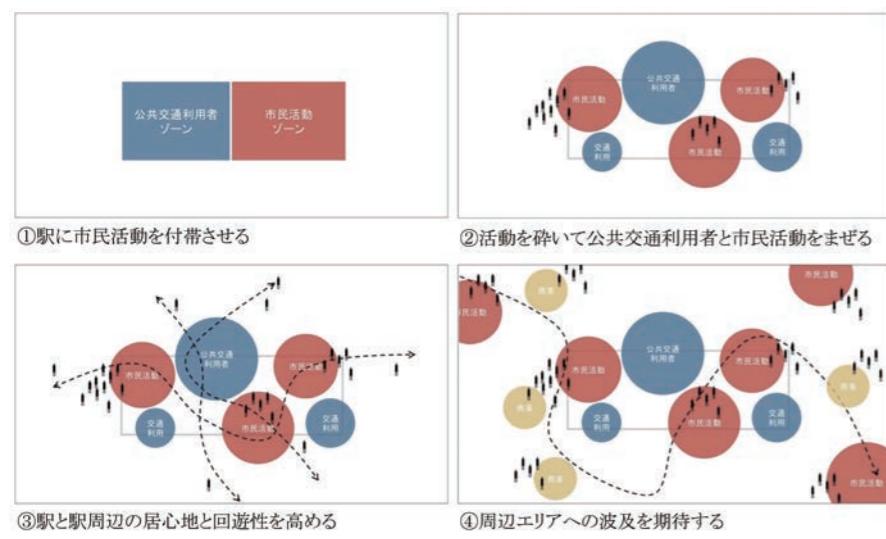


図2 ちらし寿司モデル

三つの考え方を表すダイアグラム

駅とまちの両方による影響を及ぼす整備の「デザイン」を考えるにあたり、駅前に市民の居場所をつくることのメリットを最大化することを考えました。駅の利用者と、市民活動をしにくる人々が組み合わさることによる相乗効果を引き出すためには、それらが利用する機能を隣り合わせに配置するだけでは不十分で、それぞれをできるだけ細かく碎き、ちらし寿司の具のようにバラバラに散りばめることを「ちらし寿司」と呼びました。

次に、地方都市でよくあることとして、市民が活動に活動していく中で、また飲食店などにぎわっていても、通りから全く見えないということがあります。延岡市でも、通りの寂しさに反して、建物内はにぎわっているという施設や場所は多くあり、もつたない状態だと考えました。そうした残念を取り扱うべく、このプロジェクトで生み出す市民の活動は通りから見えるようにする「市民活動の可視化」を重視すべきことを、建築を低層にすることも含めて明示しました。

さらに、JR既存駅舎とロータリーの間を複合施設の敷地とすることが決まっていく中で、JR既存駅舎と高さを揃え、柱スパンも揃えて、あたかもJR駅舎が増殖した

かのような計画にすることを提示しました。「JR既存駅舎と一体となる計画」であるべきと提案したのですが、市民アンケートを見てみると、JRの既存駅舎に対して愛着を持っているという肯定的な意見が多く、いかにも地方都市らしい低層でコンパクトな駅が、ゆったりとした空の下にあるイメージが重要だと考えました。

これらの考え方をダイアグラムとしてわかりやすく示しました。どれもが概念でありながらも空間的アイデアを含んでおり、

一種の「デザイン」です。それらをビジュアライズしてみようとしたわけですが、抽象的なダイアグラムでありながらも、駅まち市民ワークショップや駅まち会議の両方に提示したところ、意外ともいえる反応がありました。多くの市民、関係者にその目指すところの価値が伝わったことは想定外のことでした。

大らかなフレームの中に散在する市民活動

最も大きな施設である複合施設「エンクロス」の設計を行うにあたり、類似施設の使われ方や空間の質の調査を、延岡建築士会の方々と行いました。駅まち市民ワークショップで、どのような活動をしたいのかという意見に対し、その活動がどのような空間

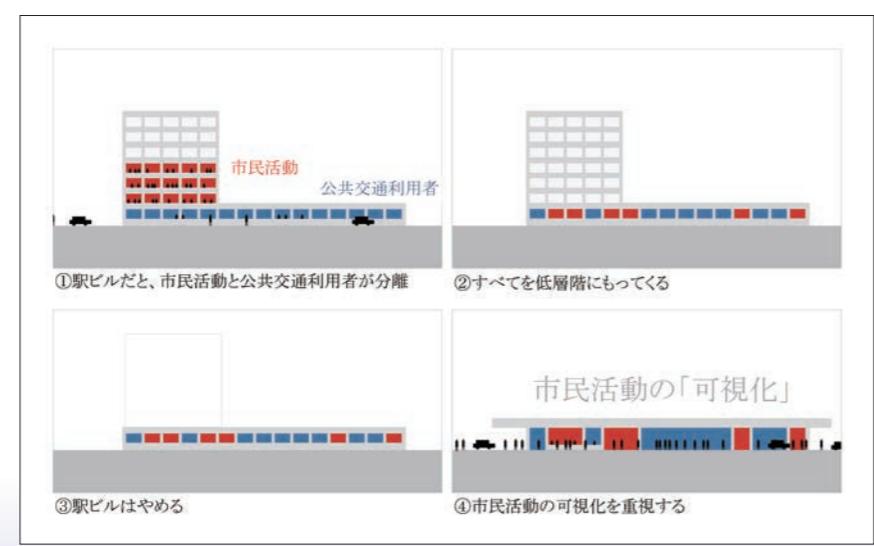


図3 市民活動を可視化したダイアグラム

であれば可能なのか、ということについての手掛かりを見つけるようしました。

全国の施設を見ていく中で見いだしたのは、空間とそれを自由に使いこなす使い手の相補関係です。市民の居場所、市民活動というのは多様な様相を呈します。小さなグループもあれば、大きなものもあり、何かを静かにつくっているものもあれば、音を出すものもあります。そうしたものが「ちらし寿司」状に散りばめられている状況をつくり出すためには、空間をつくりきらず、多様な可能性に開いておくことが一番大切だと感じ、おおらかな骨格(フレーム)としての建築を提案しました。

フレームのスパンや高さは隣接するJR駅舎に近づけるようにしながら不均質なゆらぎをつくり出しつつ、周辺施設同士との間の視線の抜けを確保、1階の階高を抑えることで通りや周辺の街から施設全体の活動が見えるようにすることを大切にしました。人の行き交う駅と一体となる施設であることを最大限に生かし、様々なものの偶然の出会いを生み出しながら、緩やかに人とのつながりを感じる居場所をつくりました。

延岡モデルと呼ばれる運営

駅まち市民ワークショップは市民のやりたいことを聞き取ると同時に、そこから、新しい駅まち空間を積極的に利用するようなコアメンバーになる市民を見いだしていく意味が込められていました。また、運営にも関わってくれる市民が出てくることを期待しました。駅前に市民の居場所をつくるという基本計画の策定が終わり、設計を本格的に行う中で、市民の居場所を誰がどのように運営するかという問題にぶつかりました。あまりないタイプの施設であり、行政職員では運営が硬直化する可能性もあることから、延岡市は指定管理者をプロポーザルで募るこ



図4 延岡モデル

とを検討し、結果として、当時、武雄市図書館での企画や指定管理が成功した経験から公共施設の指定管理事業を本格化しつつあった企業（カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社 (CCC)）に委託することが決まりました。

プロジェクトが本格的にスタートしてから、CCCによる指定管理が決まるまでの間、駅まち市民ワークショップを皮切りにして、駅まち音楽祭をはじめとする様々なイベントや活動が継続的に行われてきました。その中でコアな活動メンバーが多く生まれ、駅周辺で活動することへの機運が醸成されていきました。CCCはこうした機運の高まりを引き受ける形で、さらなるコアメンバーの調査や、市民活動や商業者の発掘を丁寧に行い、施設管理のノウハウと組み合わせながら、延岡モデルと呼ぶ持続力のある運営の基盤を築いていったと思います。今、日本の各地にCCCによる指定管理施設は多くありますが、延岡市のエンクロスはCCCが参画する前段階が長かったことが活きてているように思います。